

研究ノート

『鹿鳴館』を読んで、観て、思うこと

小 林 康 男

三島由紀夫作『鹿鳴館』は初上演から50年以上経過しても、その人気は衰えず、むしろ益々高まるばかりである。筆者は三島の戯曲を代表するこの作品を、数回読んでいたので、是非舞台で観たいと思っていた。劇団四季がこの作品の長期公演を行っている。場所は四季専用の自由劇場（浜松町駅から徒歩7分）で、昨年暮れから今年にかけて上演、さらに今年10月から11月にかけて公演している。筆者は11月16日（金）の舞台を観た。四季の自由劇場は対話劇・ストレート・プレー（straight play）だけを公演する目的で建てられ、客席数も約500席とこじんまりしている。因みにこの劇場は劇団創立50周年を記念して建てられた。

舞台上で繰り上げられる演技は毎日同じようでは同じではない。このことをよく俳優自身が語っているし、筆者のこれまでの観劇経験からも、舞台はまさしく一期一会であると感じている。特に1ヶ月以上の公演が続く今回の『鹿鳴館』は尚更である。役者の体調、役者同士の関係（今回の公演では久雄役を二人が演じているので田邊真也が演じるのか、福井唱一が演じるのかによって微妙に公演そのものに違いが出る）、また当日の観客の雰囲気などによっても、幾分公演そのものが変化する。公演は貸切りの場合もよくあるので、その貸しきりの観客の雰囲気が公演に影響を与えることもある。役者は毎回最高の演技を心がけていると思うが、劇場全体の空気に公演は左右されることも事実である。例えば観客の全てが学生であるとか、ある会社の従業員で客席が埋まっているとか、様々であるが、観劇する人は、本当に芝居が見たくて観ているのであろうかと、筆者は疑問を感じてしまうことも経験している。公演の観客の中に相

当数の貸切り席がある場合は、その公演は遠慮することになっている。劇場内の雰囲気は、本当に観たいという観客で埋まっているのが理想で、そういう時には、役者も観客から影響を受けて、素晴らしい演技がひきだされる。まさに演劇は生き物で、劇場全体が呼吸をする生物と化す。その中にいる観客は最高の時を共有することに喜びを感じる。しかしその逆もないとは言えないのが生きた演劇。またそこに芝居を観る醍醐味があり、劇場に足を運ぶ楽しさがある。

三島がこの戯曲『鹿鳴館』を書いたのは今から 51 年前で、1956 年 12 月号の「文学界」に発表された。文学座 20 周年記念公演のために委嘱された台本で、『鹿鳴館』は 1956 年 11 月 27 日～12 月 9 日まで、第一生命ホールで初演された。因みに演出・松浦竹夫、装置・伊藤喜朔、配役は朝子・杉村春子、影山伯爵・中村伸郎、季子・長岡輝子、清原永之輔・北村和夫、久雄・仲谷昇等々である。その後この戯曲は何度も公演されてきたが、近々では劇団四季が長期公演を実現している。東京（自由劇場）で 2006 年 1 月 14 日～6 月 10（104 回）、名古屋（新名古屋ミュージカル劇場）2006 年 8 月 12 日～9 月 3 日（17 回）、京都（京都劇場）2006 年 9 月 11 日～10 月 9 日（22 回）、再び東京（自由劇場）に戻り 2006 年 12 月 1 日～2007 年 1 月 8 日（27 回）、さらに東京（自由劇場）2007 年 10 月 20 日～11 月 25 日（25 回）公演を行っている。またこの作品は 1986 年に映画化もされている。監督は市川崑、脚本は市川崑と日高真也、配役は朝子・浅岡ルリ子、影山伯爵・菅原文太、季子・岸田今日子、清原永之輔・石坂浩二、久雄・中井貴一等々である。

この『鹿鳴館』は悲劇四幕というタイトルからもわかるように、大団円では主人公朝子の息子・久雄は亡くなり、久雄の父親・清原栄之輔の死を暗示して幕となる。場面は 1 幕と 2 幕が景山伯爵邸内茶室で 3 幕と 4 幕が鹿鳴館大舞踏場となっている。

1 幕、2 幕の内容を記す。

時は明治 19 年 11 月 3 日天長節(明治天皇の誕生日)、舞台は明治政府の大臣、景山伯爵の邸宅にある茶室。景山伯爵の妻・朝子は友人の大徳寺侯爵夫人から娘・顕子の恋を实らせてくれるように頼まれる。顕子の恋の相手は清原久雄、反政府派の自由党リーダー、清原永之輔の息子である。清原栄之輔と朝子の関係は朝子が 20 年前芸妓をしているときに、愛し合った仲で、久雄は二人の子である。朝子は久雄を育てて 1 年も経たない頃、清原から久雄を引取ろうという申し出を受け、泣く泣く久雄を清原に預けたという過去がある。大徳寺侯爵夫人によれば、久雄は今夜鹿鳴館を自由党の壮士が襲う混乱の中、景山伯爵を暗殺すると言う。驚愕を隠しながらも、10 数年ぶりに息子に対面する朝子は、久雄から自分がどのように育てられたかを聞く。久雄は父親が生粋の自由主義者で、理想家が高潔な人物であるが、その家庭は真つ暗闇で陰惨であったという。だからそんな「父親の理想の鼻を明かしてやりたい」と語る。朝子は久雄に、ついに自分が母親であることを打ち明ける。すると久雄から漏らされた暗殺計画は、景山伯爵ではなく自分の父親・清原栄之輔だという。

朝子の指示で女中頭・草乃は清原を迎えに行き、景山邸に導く。息子・久雄とかつての恋人を救いたい一心から、今夜の自由党の壮士の襲撃を清原に取り止めて欲しいと懇願する。清原は鹿鳴館襲撃が事前に漏れていることに驚くが、決意は固い。朝子の願いは聞き届けられないのではないと思われる。そこで、朝子はこう切り出す「もし私が生まれてはじめて、自分で立てた掟を破って、夜会へ出たとしたらどうなさいます」朝子はこれまで一度も公の席には出ず、和装で過ごしてきたが、その掟を破るというのだ。今夜の鹿鳴館の夜会にドレスを身に纏い、女主人として出るという。このことは朝子の誠の愛情からでた行為で、清原は「私にはいただくのが辛い贈物だ」と言わせ、朝子に襲撃は取り止めることを約束する。景山が帰宅すると同時に、清原は邸から姿を消す。影山と腹心・飛田天骨の密談を朝子は木陰から聞いてしまう。朝子の夫・景山

伯爵が久雄をけしかけ父親を暗殺させようとしていることが分かる。景山伯爵は自分の政治的好敵手・清原を彼の息子・久雄に暗殺させようというのだ。政治的陰謀を家庭的問題にすり替えてしまう。そこで朝子は木陰から出て、夫に「今夜私は鹿鳴館の夜会に出ます」と宣告する。

この戯曲の前半（1幕、2幕）の見所は3箇所あるように思う。1つは朝子が久雄に自分が母親であることを打ち明ける場面。2つ目が清原栄之輔と朝子の20数年ぶりの再会シーン。3つ目が朝子の夫・景山伯爵の秘密（久雄に清原栄之輔を暗殺させようとしていること）を知ってしまった箇所である。

我が子を泣く泣く手放してから20年の余、朝子が息子に対してどんな思いで生きてきたかが表れる凝縮した場面である。朝子（野村玲子）はテレビドラマではまずお目にかかれない、実に淡々とした親子の再会シーンを演じた。抱き合い泣き濡れるというおなじみの場面はなく、心に秘めた思いが、全身からほとばしるかのような、迫力ある所作で見事に演じていた。この場面でも親子の台詞は観客に実に見事に届いている。ともすると、感情に激して台詞がおろそかになる場面であるが、劇団四季のエロキューション（台詞回し）は疎かにはならない。しかし観客の中には、この演出に不満があるかもしれない。20数年ぶりの親子の再開である。固く親子が抱き合って当然と考えるかもしれない。しかし演出家・浅利慶太は何よりも、台詞回しを優先している。それは作者・三島由紀夫のこの戯曲に対する思いから出ていると考えられる。三島はこの『鹿鳴館』についてこう述べている。「『鹿鳴館』は、筋立ては全くのメロドラマ、セリフは全くの知的様式化、という点に狙いがあるので、特にセリフにすべてがかかっている以上、セリフの緊張がゆるめば、通俗的なメロドラマしか残らない」

2つ目のシーンは20数年ぶりに、かつての恋人同士が再会する場面。朝子と清原は別れてからも、心の片隅に相手に対する思いが消えたことがない。そ

の2人の再開場面は、20数年の時間を越えて、昔の時間が今に続いているかのような演技であった。会う前の朝子は「小娘のように動悸がする」と言っていたのが、目の清原栄之輔（山口嘉三）を見据えて、「私は少しのぎこちなさもない、自在な思いがいたしますの」とまで言う。2人の対話は、徹底的に台詞の明澄さを持って、生き生きと台詞が観客の耳に飛び込んでくる。また相手を思う強さは体全体に表れ、2人の眼差しの強さにあるように感じられた。舞台下手やや中央寄りに朝子（野村玲子）が立ち、舞台中央やや上手寄りに清原（山口嘉三）が立つ。清原を少し仰ぎ見る所作に、えも言われぬ美しい朝子（野村玲子）の、かつての恋人を思う心が感じられた。

3つ目は夫・景山伯爵の秘密を知ってしまった場面である。景山の企みは清原の息子・久雄をけしかけ父親・清原を暗殺させようというのだ。この秘密を聞いてしまった朝子は驚愕をぐっと押さえ、夫の前に現れ「殿様、その情報はまちがっています。今夜は決して壮士の乱入はございません」と影山伯爵（日下武史）に言う。舞台中央に対峙する2人、舞台上手の影山（日下武史）と舞台下手の朝子（野村玲子）のやり取りは、緊迫した中でも、不思議な穏やかさが溢れる。それはすでに朝子が清原に今夜の夜会襲撃の取り止めに約束させたことと、景山の何事にも動じない政治的人間の力強さが現れているからであろう。さらに景山はこの時点では、まだ久雄が妻・朝子の子どもであることを知らないからであろう。景山（日下武史）は実に政略を駆使する政治的人間を、徹頭徹尾演じている。いずれ草乃から真実を知る。この真実を知ることが、政治的人間から愛憎を前面に出す人間に代わるのである。景山＝政治、朝子＝愛の表徴と見て取ることも可能である。

3幕、4幕の内容を記す。

舞台は鹿鳴館大舞台場。朝子は、鹿鳴館の夜会にデコルテを着て登場。しかし、鹿鳴館襲撃は影山伯爵が飛田（景山の腹心の部下）を使い実際に起こして

しまう。また、女中頭の草乃から、朝子の秘密を聞き出した景山は、草乃を妾として、世話をするを約束する。鹿鳴館が襲撃されたことを自分の目を見た久雄は、「卑怯者！どうするか見ている！」と言って景山伯爵から預かった銃をもって戸外へ出て行く。銃声の音と共に清原が朝子の前に姿を現す。清原は朝子に襲撃のことを責められ、「あなたは愛する値打ちのない方です。卑劣物です」と言われる。清原は久雄が近距離から銃で撃ったが、私には当たらなかった、私の銃で久雄は亡くなったと告げる。久雄は父親を殺そうとしたのではなく、久雄が父親に殺されたかったのだと告げる。さらに鹿鳴館襲撃は景山伯爵の命令で飛田が行ったことも話す。しかし息子を殺した清原は、逆に息子から殺されたようなもの。今や生きる屍である。そして舞台から姿を消す。朝子は夫に真意を確かめると、景山伯爵からは「あなたと清原の間に在るあの何とも言えない信頼が嫉ましかったんだ」と言われる。朝子は、景山の家を出て清原と生きることを明言する。しかし、2人には今夜一夜は舞踏会を無事終了する役目がある。舞台中央で踊り、曲が止んだ時、銃声になり響き、飛田が清原を暗殺したことが暗示されて、舞台は幕を下ろす。

後半での見所は、4幕最後の場面で、息子・久雄を殺してしまった清原と朝子、そして、壮士の乱入を謀った影山とのやり取りである。

鹿鳴館の戸外に2発の銃声がとどろいた後に、清原が鹿鳴館に姿を現すと、朝子は絶えず身近にいた久雄がいないことに不安を覚える。清原から「久雄は、・・・死んだよ」という台詞を聞くや否や、朝子（野村玲子）は舞台下手やや中央寄りから、清原に向かって突き進む。この時の表情は実に愛惜に満ち、目が清原（山口嘉三）を捕らえ、母親の子を思う心情が溢れていた。壮士の乱入、その故に久雄が亡くなったことから、「あなたは約束をお破りになった。卑怯な方。久雄はそのため死んだのです」と、これまでの抑制した台詞回しとは、やや異なり、かなり感情の高まりの感じられる発声をする。自分の息子の死を

聞いて、心穏やかな母親は居ない訳で、この場面の朝子（野村玲子）の清原を非難する台詞の抑揚には納得させられる。清原（山口嘉三）は朝子の非難にも、「私は約束だけは守る人間だ。さようなら。もうお目にかかることはないだろう」と事実を淡々と述べるに留まる。清原（山口嘉三）は足元が覚束無く夢遊病者のように、死んだ屍のような表情で鹿鳴館から出て行く。息子を殺してしまった、父親の慙愧の念に絶えない演技は、清原（山口嘉三）にとって最も難度の高い演技ではなかったかと思う。過度に悲しみを表現していない演技に好感がもてた。過剰な演技は舞台上のほかの役者との均衡を壊しかねない。一方朝子（野村玲子）はその場に立ち尽くし、真相を知ると、こちらも生気がない表情になり、舞台中央に、景山伯爵（日下武史）と対峙する。朝子は景山の取った行為を「政治の問題」と片付け、責められないと断言。それを聞いた景山伯爵は「この事件は愛情の惹き起こした事件だとはいえないかね。私は、・・・嫉ましかったんだ」と言う。この時の景山（日下武史）は毅然とした中にも放心したような表情で、朝子（野村玲子）の顔を見つめる。愛を持った心が憎しみの心に入れ替わる、その演技力とはこのような景山（日下武史）の表情なのかと、心に焼きついた。朝子と清原の信頼の強さに、景山は憎悪の炎を燃やしたのだ。

シェイクスピア作品に『アントニーとクレオパトラ』がある。エジプトとローマを主要な舞台とし、マーク・アントニーとオクテヴィアス・シーザーの対立、クレオパトラとオクテヴィア（シーザーの姉、アントニーの妻）の対立、さらには「エジプト世界＝愛」と「ローマ世界＝政治」の対立を際立たせて物語は展開する。アントニーは「政治の世界」と「愛の世界」に揺れ動き、ついには「政治の世界＝ローマ」から、「愛の世界＝エジプト」に逃げ出してしまう。もちろんエジプトにクレオパトラが居るからである。しかし「政治の世界」（オクテヴィアス・シーザー）が押し寄せ、アントニーとクレオパトラは「愛の

世界＝エジプト」でシーザーに滅ぼされ共に死んでしまう。だが、二人の愛は死後にしっかり結びつくことを予感させて幕を閉じる。

『鹿鳴館』を読み、観た時に『アントニーとクレオパトラ』を思い出した。つまり「政治の世界」に居た景山伯爵が、朝子の清原への愛に嫉妬し、朝子の愛を確実に得たいと思い、失敗するのだ。景山は鹿鳴館を偽の壮士達に襲わせ、この首謀者を清原だと朝子に思わせることによって、朝子の愛を確かなものにしたかった。また出来ると信じていた。清原が死んでいれば可能であっただろう。しかし清原は息子に暗殺されずに生き残り、自分が息子・久雄を殺害したこと、そして偽壮士も襲撃の事を朝子に明かす。景山は朝子の愛を得られず、「政治の世界」に戻らざるをえない。初め朝子は景山と共に「政治の世界」に居たが、息子・久雄や清原と再会して、「政治の世界」から「愛の世界」へ進み、掛け替えのない2人を失って、確実に「愛の世界」で生きていくことを暗示している。景山との決別は明らかで、朝子がどこに向かうかは、示されてもいないし、暗示もされていない。さらにこの作品の大団円で、朝子の死の暗示も全くない。しかし筆者には朝子が、息子・久雄と清原の居る「愛の世界」に、死をもって赴くのではないかと思えるのである。

参考文献

三島由紀夫 『鹿鳴館』（新潮文庫、1984）

劇団四季編集部 「鹿鳴館」（劇団四季編集部、2007）

小林康男 「アントニーの愛と政治の世界について」（『片平』第23号、1988）

参考サイト

<http://movie.goo.ne.jp/movies/PMVWKPD17742/cast.html>

http://www.terminal-jp.com/number/xtr/kang_128.htm